



20年（30年）経って思い出したこと

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
日本曹達株式会社 農薬化学品事業部開発部長
瓜原 一郎

先日、会社から永年勤続20年を表彰された。「表彰のお知らせ」を受け取ったときに初めて、20年勤めたと気付く始末で、感無量であった。というのも年齢の割に…と思われるであろうが、当方、現在の会社は転籍後の2社目で、1社目で10年勤務し、合わせて30年勤めている。研究、普及、営業、開発と色んな部署で働かせていただいた。30年間で一番長いのは、意外だが研究部門で、特に1社目の10年間は丸々研究所に在籍していた。既に世に出ている、いわゆる現有剤（殺菌剤）の研究を担当していた。今の会社は、殺菌剤のみならず殺虫剤、除草剤とポートフォリオが充実しているが、1社目では当時、担当剤といえばイミノクタジン剤（ベフランと上市したばかりのベルコート）、ほぼそれのみであった。手がける剤は混合剤を含めても多くないのだが、現場経験は少なく知らないことが多い。そんな状況下でも、身に付いたかどうかはともかくとして、先輩から教わったことは「自社剤の良さを如何に引き出す試験を設計するか、データを積むか、いかに使用者のためになる製品を提供するかを考える」ことであった。表彰式の最中にふと思い出したが、イミノクタジン剤の仕事では印象に残っていることがある。福島先生という顧問と仕事をさせてもらった。青森りんご試験場と病害虫防除所に勤められていた先生が、顧問に就いてくださった。特にリンゴ分野での普及拡販、他社の新剤含む数多の競合剤との差別化を図るべく普及データを積もうとしていたときで、当時は斑点落葉病の防除がまだ大きな課題になっていた頃だった。現地試験で青森県からはるばる福島県の農家圃場まで来ていただいた時の先生の第一印象は、背の小さい、人の好きそうな「おじいちゃん」であった。聞き返さないと聞き取れない弘前弁。前歯が抜けていて（多分その横も）、スースー音がしてうまく聞き取れないし、飯粒もぼろぼろ落ちる。お酒大好き。だがそんな先生が、圃場に佇む姿が格好いい。当方が汗かきながら背負い動噴を準備し、水汲みして薬液を調製する間、先生は試験設計を眺め黙々と矮性台りんごが立ち並ぶ圃場を歩き、一本一本丹念に樹勢を見ながら区割りをする。準備が終わって近寄れば「はい、くすり散布すべ

し」と一言。当方が背負い動噴でよろよろ散布する姿を見守り、薬液が葉に載っているかチェックしながら、終われば「うむ、ごくろうさん」。その後、食事を済ませ、福島駅で別れる。先生が格好いいのは調査日。圃場に着くや、調査対象の新梢をぐわっと、その小さな体の脇に挟み込んで、銀行員が札束を数えるように罹病葉を素早く調査していく。当方は傍でその姿に見惚れながら、弘前弁で読まれる罹病指数を遅れまいと記帳するのみ。先生が更に格好いいのは得られたデータを打ち合わせる時。集計すれば、今までなかなか取れなかった、自社剤の特徴をアピールする競合剤比較データが現れた。弘前弁で「そりゃそうさ、最強の斑点落葉病防除剤だもの」と言ってくれた。当方よりも我々の剤に自信を持ってくれている。おそらく我々の剤を愛してくれている。「知識と経験の集積」といえばそれまでだが、今思えば我々の試験目的を汲み取り、その背後にある営業の思いも汲み取り、それを盛り込んだ設計と一緒に考えてくれていた。試験場在籍時から我々の剤を見てくれていたこともあろうが、それにしても剤の特徴を把握し、圃場の状況も見極めながら、生産者・指導者・メーカーに有意義なデータをイメージし、しかもきっちり取ってくれた。なぜ今、先生のことを思い出したのかと考えた。これまでの30年間で農業を取り巻く状況は大きく変わり、気候変動・温暖化にともなう病害虫のトレンド変化をはじめ、みどり戦略、再評価制度、原材料価格の高騰等、様々な影響を受けて、新規剤創出や、既存剤の登録維持すら困難になっている。それでも人口増加に伴う食糧生産効率の向上が求められる中、何が農業に求められるか、ニーズを見極めて仕事をするのが大事だと、この機会に振り返らせてくれたのだと思う。外的環境が大きく変化しても、生産現場のニーズを見極めて、より安く、より良いものを作るという気持ちを忘れずにいたい。